

を見ていただくことで、かなり研究所の仕事を知っていただけるのではないかと思います。日本語教育指導普及部の「児童生徒に対する日本語教育カリキュラムに関する国際的研究」による文献検索 Web サイト、先ほど述べました「文献一覧」累積データベースなどもご利用いただければ幸いです。日本語教育研究室のホームページはかなりバラエティーに富んでいまして、相談室、日本語教育の催事、所蔵文献・報告書や助成金研究課題一覧、会話文字化資料、1枚の写真から交流、写真・素材、多言語表示の案内、インターネットと教育の情報、ことばクイズとあそび、日本語教育って何？、日本語教育のことばの意味、研究プロジェクト一覧、自由記述ボード、などのページがあります。また、他のサイトの情報、例えば、研究会、学会、政府関係機関、教育委員会、出版・メディア、日本語学校、国際交流会、ボランティア団体、交流助成法人、助成団体などに関するものも得られます。

このように、インターネットは、情報の収集・発信という面では大変な力を発揮するものですが、現在私たちが抱えている問題点は、研究所としてしっかりとしたサポート体制が整えられて充実がはかられているというよりも、能力のある研究員の個別的・ボランティア的働きによって、仕事が維持されているという点です。これは早急に解決されるべき問題だと思います。

さて、日本語教育学・日本語学の人的ネットワークの構築ということも、やはり私たちの仕事の大切な部分であり、その面についても言及したいと思います。人的ネットワークには、(1) 招へい外国人研究員制度一日英、日独、日ロ、日中対照研究者との共同研究、(2) 外国人等研究員制度、(3) 日本語教員研修修了生(約450名)の国内外での活躍と OB 会の運営、(4) 地域日本語教育ネットワーク(北海道、秋田、山形、仙台、新潟、千葉、埼玉、東京、東海、愛媛などでのボランティアや日本語教員の連携)などがあげられます。無論、現職の日本語教員を対象とした長期研修は続けておりますし、研究者の方であれば、図書館、資料室、リソースルーム等の利用についても便宜をおはからいしています。その他研究会等を常時開催しており、国際シンポジウムや大小さまざまな研究会などを開催しますので、どうぞご参加ください。

以上、簡単に日本語教育センターを中心として紹介させていただきました。

参考文献

『国立国語研究所 平成11年度概要』

学術情報センターのサービスと国際利用

宮澤 彰

1. 学術情報センター

最初に、学術情報センターとは何かという紹介を行う。学術情報センターは文部省の大学共同利用機関のひとつで、国外では NACSIS (National Center for Science Information Systems) という名前のほうが知られている。学術情報というと、論文のデータベースとか、目録データベースとかいう類いのものであるが、学術研究の基盤を整備している。大学関係者は、学術情報センターを間接的に利用して

いても、その存在やサービスについて知らないということが多い。

非常に要約すると、学術情報センターは3つの事業をやっている。ひとつはネットワークで、インターネットバックボーンの世界サービスをしている。大学からインターネットがただで使えるのは、学術情報センターの回線を通っているからである。その回線借料は、結局国の予算でまかなわれている。国の施策として、インターネットは学術研究に必要で、そのための予算を各大学が別個にプロバイダと契約して使うより、大学全体として直接回線を借りて使ったほうが安くつく、ということでこうなっている。そのインターネット回線の計画や運用を学術情報センターで行っている。

2番目は、研究者向けのサービスで、電子図書館、学術雑誌のオンラインサービスと、情報検索、種々のデータベースの世界サービスを行っている。3番目は図書館向けのサービスで、目録と図書館間相互貸借(ILL)の世界サービスを行っている。現在日本の大学図書館では、目録はもちろんデータベース化されているが、その目録を作るのにNACSISにつないでオンラインで作るとというのが常識になっている。

学術情報センターは、もちろんこの他にも研究や研修事業などの活動はしているが、サービスの骨格だけとれば、上記の3つに要約できる。以下、研究者向けと図書館向けの2つについて、もう少し内容を見ることにする。

2. 研究者向け情報サービス — 電子図書館と情報検索

電子図書館サービス NACSIS-ELS は、研究者向けの学会誌オンラインサービスである。電子図書館といってもいろいろ種類があるが、NACSIS-ELS は学会と提携して、その学会で出している学会誌の冊子体の表紙から全ページを、デジタル化したデータベースをサービスしている。これに加えて、各論文単位の書誌情報も入力しており、著者やキーワードで検索することもできる。これを表示して印刷すると、コピー機で取るよりは質のよい印字で論文が手に入る。

現在80学会、156の学会誌がオンラインで手元に出せる。そのうち人文系の学会は29学会、雑誌のタイトル数で39誌。関係の深そうなどころでは、日本教育学会の『教育学研究』とか、史学会の『史学雑誌』などがサービスされている。

情報検索サービス NACSIS-IR は、主として2次情報、いわゆる論文索引の類いのデータベースを59種類サービスしている。自然科学、工学系のデータベースが多いが、人文科学に関係ありそうなものを紹介する。

学術雑誌目次速報データベースは、大学で出版する主として紀要などの雑誌の目次から、著者名、タイトルなどを採録している。各大学の図書館が分担して自分の大学で出版する紀要類の入力をしている。現在2600タイトルほどが検索できる。

研究者ディレクトリは、日本全国の大学関係の研究者約13万人が、専攻分野、書いた論文のタイトルなどから検索できる。このデータベースは NACSIS-IR の中でも、利用の多いほうで、海外からの需要も多い。

維新史料綱要データベースは、多少毛色が変わっている。維新史料綱要というものが史料編纂所で作られていてこれをデータベースにしたものである。もう一つ変わったものとして、現代邦楽作品データベースというものもある。これらは学術情報センターではなく、外部で作られたデータベースを学術情報センターからサービスしている例である。また、国外で作られたデータベースを買ってサービスしている例として“Arts and Humanities Citation Index”がある。

3. 図書館向けサービス — 目録所在情報サービスと ILL

目録所在情報サービス NACSIS-CAT は、全国の大学を中心とした679機関の図書館の参加するオンライン総合目録作成システムである。そのデータベースは、現在約500万タイトル、4000万所蔵の大規模なものである。全国の図書館では日々受け入れる本をこのシステムに入力していて、毎日2万所蔵、2千タイトルくらいずつ増加しつづけている。

このサービスは図書館の目録作成用のものであるが、結果として維持されている総合目録は上記の NACSIS-IR でサービスしているほか、WWW で無料一般公開されている。Webcat という名で URL は <http://webcat.nacsis.ac.jp>。非常によく利用されていて、1日あたり2万回くらい検索されている。そのうち2パーセント程度が海外からの検索である。

図書館間相互貸借 NACSIS-ILL は、自分の図書館にない論文のコピーを取り寄せたり、本を借りたりするサービスの、申込みメッセージを送り、状態管理、料金精算を行うシステムである。全国の図書館同士で1日あたり約4千の申し込みがこのシステムを通じて処理されている。そのうち複写の申し込みが約9割、残りが現物貸借となっている。

この NACSIS-ILL システムの稼働で、申し込みが即時に届くようになり、はがきによる申し込みに比べ、論文入手時間の短縮が可能となった。現在の実績ではほとんどの申し込みが5日以内で届いている。この値は例えば米国での十数日に比べると圧倒的に速く、それだけ日本の図書館員がよく働いているという評価をしてもよいと考えられる。

4. 国際サービス

NACSIS のサービスは原則として国外からでも国内からと同じように利用できる。もっとも、海外から導入したデータベースは、契約上国内でしかサービスできないというような制限はある。NACSIS-IR では、海外ユーザの場合、個人単位でなく機関単位でユーザ ID を発行しているが、現在米国、英国、ドイツ、オランダ、オーストラリア、韓国などの18の機関が利用している。とはいえ利用実績はあまり多くなく、1月に1ユーザあたり数回程度である。

図書館向けの目録所在情報サービスでは、海外で11の日本語図書館（試用中を含む）が参加している。英国で7つ、オックスフォード、ケンブリッジ、ブリティッシュライブラリー、シェフィールド大学、スターリング大学、ロンドン大学の SOAS、国際交流基金のロンドン日本語教育センター、他に、バンコク日本文化センター、チューリッヒ大学、ストックホルム大学、北京日本学研究中心である。最後の北京日本学研究中心は北京外国語大学の中にあつて、NACSIS-CAT の利用を現在始めようとしているところである。

Webcat の利用は世界中誰でも、インターネットを通して利用できる。前述したように1日2万検索の2パーセント程度が国外からで、うち半分程度が米国、残りではドイツが約14%と多く、イギリスの4%、以下1%までにインドネシア、オーストラリア、台湾、フランス、カナダと続く。

5. 国際利用の問題点

国際利用の場合の問題点としては、まず、技術的問題がある。最初は通信上の問題、これは、NACSIS が国際サービスを始めた10年前には大きな問題であったが、インターネットの普及により、ほとんど問題なくなってきた。多少残る問題としては回線、特に日米間の回線の混雑がある。これも、最近の増強により現在ではスムーズになっている。

次に、日本語表示と入力の問題がある。10年前には日本製のコンピュータでないと日本語を出せなかった。あるいはマッキントッシュが早くから、日本語キットというソフトを出して、これで日本語が使えた。そのうち、DOS-V というのが出てきて、これで向こう製のコンピュータに、オペレーティングシステムだけ DOS-V をのせれば日本語が使えるというようになった。ただ、米国のユーザなどは英語版の Windows のままで日本語が見れなければいけないというような要求を出してくる。

そのためのソフトウェアとして現在最も便利なのがマイクロソフトの Global IME というもので、マイクロソフトのインターネットエクスプローラ（英語版）から、日本語の Web ページが見れるし、入力もできるというものである。（中国語、韓国語もできる）。このソフトはマイクロソフトの Web サイトから、無料でダウンロードできる。

もっとも、こういった技術的状況は変化が激しく、Global IME もつい最近利用できるようになったばかりで、来年にはもう状況が変わっているかもしれない、というところがある。まだまだ、多言語に関する技術的問題は多く残されている。

技術的問題以外では、料金の支払問題がある。学術情報センターも国の機関で、料金は国庫に入る。このため、国の会計制度で縛られていて、日本円でしか払えないし、原則として現金取り引きしかない。現金が国庫に振り込まれないと情報を売ってはいけないということになる。このために、海外の利用者に対しては第3者機関を通したデポジット制度を設けているが、利用は多くない。

料金問題のもう一つとして、金額の問題がある。NACSIS-IR の料金は米国の利用者からは安いといわれるが、アジア諸国からだと高く使えないといわれる。国内ではまあまあ結構な値段ですねくらいに言われる。特にアジア諸国を考えた場合、単に為替レートの問題ではなく、情報の値段をどう設定したらよいかは問題になるところである。

6. おわりに

以上、学術情報センターの紹介とその国際利用、国際利用の問題点について述べた。なお、学術情報センターのサービスについて詳細は <http://www.nacsis.ac.jp> を参照されたい。

フロアーからの発言・質問

司会：長友 和彦

発言：土谷桃子（お茶の水女子大学・院）

土谷と申します。私は1994年から4年間、ニュージーランドの大学で日本語を教えて参りました。この大学、オタゴ大学と言うんですが、1993年、私が赴任する前の年から日本語科が始まったばかりで、ほんとに何もなくて全部一からスタートするという、本もない、人もいない、何もなかったところから始めました。

問題点は午前の先生方がおっしゃったように同じで、本がないですとか、情報がこないということだったのですが、午後の今の皆様のご発表を聞いていたら、何か悩んでいたことが全て今日お話を聞いたことを知っていさえすれば解決したんじゃないかという、知らなくてほんとに残念無念という気がするんですが、現在でも海外で困っている先生方がいらしたら、今日の会議にできればよかったのにと心より思います。

発表なさった先生方それぞれについて、ちょっと感想を述べさせていただきますと、最初に畑佐先生はコンピュータのお話で、まさに私もコンピュータに弱い方ですので、聞いていてとても勉強になりました。で、私が赴任していた大学でも、コンピュータ教材といいますか、コンピュータを沢山メディアラボのようにして導入していたんですが、やはりそれを使える先生がいないということと、あと、そのランゲージセンターを作ったのだから生身の先生の数を減らそうという、何か変な方向に話が進んでしまっていて、日本語科の人員も私が辞めたときにひとつ減って、そしてまた次の年にも一つ減ってということで、なにか、語学にそんなに明るくない方にはコンピュータを使えば先生がそんなにいなくてもできるんじゃないかというような、変な幻想があって、それでかえって私たちは困ったという記憶があります。

中村先生と佐々木先生のお話では雑誌の目録が非常に実は整理されていたのだということを知りまして、ほんとにショックが大きかったです。私は四年間、向こうにいましたが、大学が大変親切で一年に一回は日本に帰ることを許してくれまして、その度に国文学研究資料館に足を運んで、その一年にで